

# 上田 広 素 描

——戦時体制下の文学者 (三)——

都 築 久 義

## はじめに

上田広の文学碑が、今年（昭和五十六年）の四月、千葉県一宮町に建った。上田広といえはもはや忘れられた作家であり、記憶されているとすれば、戦時中に火野葦平と並んで活躍した兵隊作家として、むしろ悪名の方が高いかもしれない。にもかかわらず、地元では彼の出世作にちなんで「黄塵忌」が営まれ、文学碑まで建てられたことにわたしはさまざまな感慨を覚える。

上田広は労働者出身の作家である。自らの体験をもとにプロレタリア文学を書き、自らの経験をそのまま戦記や時局作品にまとめ、やがて戦後になって消えて行ってしまったという文学的生涯は、貧しくて進学ができず、働くことを余儀なくされた文学青年が、文学への情熱と野心を持ち続けたがゆえにたどらねばならなかった道であり宿命であろう。上田広はまさに、その典型の一人だった。そこに、わたしの興味と関心もある。

いまだ「上田広論」を書きあげるには、資料的に不十分であるので、とりあえず「上田広素描」として、ここに中間発表をしたいと思う。なお、拙稿をなすにあたっては、上田広の長女、香野光栄、旧友の山本昇、金親清の各

氏にはお世話になったことを記して謝意を呈します。

### 国鉄機関士

上田広は明治三十八年六月十八日、浜田源三郎・あきの長男として、千葉県長生郡豊管村に生まれた。本名は浜田昇。姉にいち（明治三十五年一月五日生）、弟に巳一（大正六年十二月六日生）がいた。浜田一家は昇が小学校に入学する頃、千葉市本町に移り、父は石炭商の通い番頭に、母は料理屋の女中になって生計を立てた。上田広は戦後に書いた「私の黎明記——或る追放者の手記」（『文芸首都』昭26・6—8）には、彼の少年時代の素描もあるが、そこには「一家を支へるに足る収入のない父」とか、「私たち一家の生計をたてられないで、好きな晩酌をやるのに、母まで女中奉公にだしておきながら……」といった記述があり、「父の死」（『婦人公論』昭15・3）にも「家に落ちつかない父はなにをやっても旨くないかなかった。失敗ばかり繰返しては帰って来た。そして、また私たちを放って出て行った……」と、頼りない父を持った一家の貧しさと、母の苦勞が描かれている。母親が料理屋に働きに出なければならぬほどの経済状態だったから、姉も小学校を卒業すると女中奉公に行き、弟は生まれると里子に出された。昇も学校から帰ると、母の働く料理屋に出かけ、一人息子の坊ちゃんの遊び相手をしていく。むろん、こうした、家庭環境では上級学校へ進学するような余裕は、経済的にも気持のうえでもあるはずはなく、大正七年に千葉第一尋常小学校を出て、高等科の二年を修了したあと、子どもの頃から憧れていた機関士を志して国鉄に入った。

彼が機関士に憧れた動機を、「職場礼賛」（『帰還作家の手記』）で次のように回想している。

小学校へ通ひ始めた頃から、私は汽車がたいへん好きであつた。あの黒い煙を吐きながら幾つもの車両の先頭を行く機関車を見てゐると、不思議に胸の躍るのを覚えた。その機関車の上で働いてゐる乗務員の青い作業衣も、以上に大きな魅力であつた。

その頃の私の家は、房総線のある踏切の近くにあつたので、毎日のやうに線路へ出ては、汽車のくるのを待つてゐたものである。そして汽車がやつてくると、いつも私は先頭の青い作業衣の乗務員に向ひ、拳手の敬礼を送つてゐた。するとたいいていの場合には、向ふでも手を挙げてくれるか、なにか呶鳴つてくれるかしたが、私にはそれが嬉しくてならなかつた。乗つてゐる人の職名が、機関士（当時は機関手）と機関助手（当時は機関助手）であるのを知つたのも同じころである。私は真剣に、大きくなつたら機関士にならうと思つた。学校友達に先生に質問されて軍人になると答へたり、飛行家になりたいといつたりしても、私は誇りをもつて、その希望を述べてゐたやうに思ひ返される。

憧れの鉄道員になつた浜田少年は、千葉機関庫で機関車の掃除や使番などをしたあと、東京の鉄道教習所の機関助手科に進んだ。教習所の訓練を経て、いよいよ機関助手見習となり、房総線で機関車の罐焚きをやるようになった。子どもの頃に拳手の礼を送つてゐた青い作業衣の乗務員だ。ところが、このいちばん初歩で基礎的な仕事である罐焚きがうまくできず、自信を失つてしまふ。そのため、「そのうち、私は自分の腕の拙劣さがいやになつたばかりでなく、機関車に乗つてゐること自体がたまらなくいやになつてきた。」（「私の黎明期」という。そこで、機関車から降ろしてもらい、機関庫の事務手伝いの仕事にかわつた。考えてみれば、一方で彼は文学への強い関心も持っていたのだから、そもそも罐焚きのような肉体労働は不向きだったかもしれない。

事務手伝いの仕事にかえてもらおうと、東京の夜学に通うようになった。が、「私は三つの夜学の門をくぐってゐた。東京工業学校、神田英語学校、研数学館の三つである。これ等の学校は何れも神田にあって今日は東京工業学校へかければ、明日は神田英語学校、明後日は研数学館と云ふ具合にしてゐた。」(同前)のでは、卒業はおろか長続きもしなかつたのはいうまでもない。

その後彼が再び機関車に乗ったかどうかは明かではない。小学校時代の後輩で文学なかまとして長いつきあひのある金親清が編んだ、戦時中の改造社版『新日本文学全集 上田広・日比野土郎集』(昭和十八年三月刊)の年譜にも、この間の事情は詳しくふれておらず、昭和十年の項に、「千葉運輸事務所に転ず」とだけ記されている。これ以後は機関車に乗ることはなかつたであろう。また、「妻への手紙」(『新小説』昭21・8)には、結婚当時、「鉄道部内に秘密につくられてあつた組合の運動と、毎月の生活費に足りない給料をもらふためとでろくに家にあつたことがなく……」とのくだりがあり、組合活動にも首を突っ込んでいたことも推測できる。上田広が吉田さわと結婚したのは昭和七年。彼女は明治四十一年に千葉市に生まれ、大正十五年に千葉高等女学校を卒業したあと、母校で事務員として働くかたわら、島よしえのペンネームで文学活動も行なっていた。後述の『文学建設者』では夫と一緒に同人に参加し、短篇集『囚人馬場』(新文学社、昭11・5)もある。同著には窪川いね子が序文を寄せている。彼女は昭和五十三年に亡くなった。上田広とのあいだに三男一女がある。

### 「文学建設者」に参加

小学校時代の同級生で、自身も文学少年だった北田浩は、『追悼 上田広』(上田広文学碑建立準備会、昭55・5)のなかで、「文学好きな連中が俳句を作り出した。『少年』『少年倶楽部』へ投稿して賞品のメダルを取ろうとし

たが、取れなかった。たまたま秀作欄に入選した浜田昇や藤井茂樹に選ばれていた。……彼の家に毎日毎晩集合した。なまはんかに文学書を読んでプロレタリアを論じたり、厨川白村の『象牙の塔』を愛読し純情をかきたせられていた」と語り、『文壇夜襲』や『鍛冶場』などという同人雑誌を、千葉在住の文学青年とやっていたとも書いている。

一方、前述の金親清の編んだ年譜には、大正十三年の項に、「新井紀一を中心とする『創作朗読会』の組織されるに及び、金親清とともに入会、毎回上京、自作を朗読し、批判を交換す。同会員、坪田譲治、大島萬世、久板栄二郎……と相識る。中河与一の知遇を受けしもこの年なり。」とあり、昭和四年の項には、「水守亀之助、藤沢清造の知遇を得。……武田麟太郎を識りたるもこの年なり。」と記載されている。小学校の同窓生や千葉在住の文学なにかまだけでなく、東京に出かけていって文学的知友の輪を大きくしていたようだ。現在、この時代の彼の活動状況は、彼がかかわった雑誌が見当たらず、確認できないのが残念だが、小学校時代から文学への関心と熱望が高く、その志を持続していたことはたしかだ。

上田広が関係した雑誌で、いま確認できるのは、『文学建設者』がいちばん早い時期のものである。上田広というペンネームもこの雑誌から定着させた。『文学建設者』は、日本プロレタリア作家同盟の解散（昭和九年二月）前後に、あいついで創刊された『文学評論』（昭9・3）、『詩精神』（同）、『現実』（昭9・4）と同系列の雑誌で、平野謙の記述（『文学昭和十年前後』文芸春秋、昭47・4）にしたがえば、「『文学建設者』『文学評論』『詩精神』などの諸雑誌は、作家同盟解散後に創刊されたものではなく、同盟の末期に、そういう言葉をつかえば、いわば同盟の中央部の統制に違反して刊行されたものである」。

創刊号の奥付には、昭和九年二月一日発行、発行兼編集人・橋本正一、発行所・歩行社（東京市芝区七丁目十番

地)とある。大きさは菊版、一〇三頁となかなか部厚い。

創刊号の目次を掲げておこう。

創刊の言葉

小説 老人

藤森成吉

小説 草履

島田和夫

小説 お豊と貞吉

田中英土

小説 谷間の村

橋本正一

小説 煤煙

金親 清

失はれた原稿

松村耕治

ザ・ピー

酒井重治

市井事その他

島よしえ

おだてゝはならぬ

上田 広

「老人」の作者

島田和夫

近信

黒島伝治

文芸・文学界・文化公論

金親 清

中央公論の作品

田中英土

文芸春秋・新潮の作品

橋本 正一

改造の作品

上田 広

プロレタリア文学の新段階

山田清三郎

文学批評の問題

鹿地 亘

この雑誌が「中央部の統制に違反して刊行された」といわれながら、委員長の上田清三郎や組織部長の鹿地亘が寄稿しているのが興味深い。藤森成吉は初代の委員長だがすでに脱退していた。二号以下には、林房雄、亀井勝一郎、窪川鶴次郎、立野信之らの旧幹部で、いわゆる転向作家がずらりと執筆しているところに、『文学建設者』の姿勢と立場がうかがえる。同人名簿は載っていないが、中心メンバーは、橋本正一、島田和夫、田中英土、金親清等の若い作家同盟のメンバー。上田広は金親清との関係で同人に参加したはずだ。千葉の文学グループからはほかに松村耕治と島よしえが加っている。松村耕治は本名、山本昇。現在は千葉県・八街町長。島よしえが上田広の妻であることは前述した。

『文学建設者』の名実ともにリーダーだったのは金親清である。彼は明治四十年に千葉市の貧農に生まれ、農民運動にも従事したのち上京し、人夫や雑誌社の臨時雇員をしてプロレタリア文学運動に参加。プロレタリア作家同盟が結成（昭和四年二月）されるや、第二代委員長の江口渙のもとで専従書記にもなった。当時の彼の活動の一端は、江口渙が『たたかひの作家同盟記（後編）』（新日本出版社、昭和43・5）に活写している。文学的にも、『ナツプ』に連載した『旱魃』（昭和6・7・9）を宮本顕治が高く評価し、はやくから頭角を現わしていた。上田広が

かような閱歴を持つ金親清と深く交際していたとすれば、国鉄機関庫で秘かに組織されていた労働組合にかかわったり、現場労働者であることをテコにして、プロレタリア文学指向の強い作品を書いたとしても不思議ではあるまい。といってもプロレタリア作家同盟に加盟した形跡はない。その点は後述の「太原への道」でも書いているし、山本昇氏（前出）にも確かめてみた。

さて、上田広のこの雑誌への寄稿は、創刊号のあと、「金富玉」（二号）、「藤ヶ崎友吉の死」（七号）の創作が二本と、「同人雑誌評」（五号）、「六月号の同人雑誌」（七号）の時評が二本ある。『文学建設者』は第一巻七号（昭和九年八・九月合併号）でいったん休刊をし、その後『文学建設』と誌名を改め、さらに昭和十一年一月に後継誌として『新文学』を発行したが、その詳しい経緯は不明である。ついでながら、『文学評論』（昭11・3）に、『新文学』の立場」を橋本正一が寄せているものの、発刊事情などにはふれていない。（注1）

雑誌の広告によって、『文学建設』や『新文学』に、上田広は「全線」という小説を発表していることがわかるが、この小説は、立野信之が主宰した『長編小説』（昭12・3創刊）の第一巻四号・五号（昭12・6―7）に再連載してひとまず完結させた。この作品は国鉄機関車を背景に、現業委員の選挙をめぐる展開される現場労働者の実態を描いていて、上田は、「この一、二年來、私は殆ど没頭といふ言葉があてはまる生活振りだ『全線』を書いてきた」とも、『長編小説』の創刊号で述べている。

「全線」や『文学建設者』以外に発表した彼の作品で、現在判明している創作を列挙すると次のとおりである。

## 電化

『文化公論』 9年1月

## オンドル夜話

『文学評論』 10年8月



濃霧

『文学評論』

11年7月

熊

『文芸首都』

11年11月

見えない信号

『早稲田文学』

12年2月

孤独年譜

『文芸首都』

12年12月

和平の場合

初出不明(注2)

扇の屋根

初出不明(注2)

持廻り

初出不明(注3)

構内

初出不明(注3)

注2 『歩いて来た道』

(学芸社 昭15・1) 所収

注3

『自選短篇集 濃霧』(経済評論社 昭21・5) 所収

これらの作品が国鉄の現場労働者である自身の体験や身辺に題材を得ていることはいうまでもないし、プロレタリア文学の手法で描かれていることもあらためて強調するに及ぶまい。上田広はこの初期の作品と自分の文学的立場を回顧して、

私は何年かの間左翼的な文学を勉強してゐた。幾つかの作品も書いてみた。然し私は間もなく、ろくなものを書かないうちに、所謂転向時代をむかへなければならなかつた。世には転向者が続出し、その声明書が発表された。そして新しい立場から大きな作品を意図し、実際に仕事にうつしても見せてくれた人も少くなかつた。

た。その仕事をいまだにつとけてゐる尊敬すべき作家もある。けれども多くの転向作家は、長いこと沈黙を守ることによつて、曖昧な態度を地方にゐる私などに印象つけた。幾つかの作品こそ書いたが、社会的には存在してゐなかつたと云つてもよい私などは、別に声明書を發表する必要も認めなかつたけれど、事毎に身辺の人には自らの転向を強調したものであつた。そして転向したつもりであつた。(と云ふやうに思ひかへされる。) 幸か不幸か、文学の面にだけ囿りついて離れなかつた私は、「党や団体を脱することや、検事局で謝ることや、転向者保護団体の更新会や同友会に籍を置くことなど」を経験しないで済んだが、それだけに厳格な自己批判にはいり得なかつたことも事実である。私は当時のさうした記録を持つてゐない。然し私は僅かに残つてゐる作品を読みかえしてみても、何れともつかない混迷のまゝの私があるのを発見することが出来る。そのやうな生活も何年か続いた……………。

と、戦時中に「太原への道」(『文学界』昭16・6)で告白している。

しかし、「支那事变」が彼の態度を明確にさせた。戦場で敵の砲弾をくぐり、「私は仲間といつしよに死なうと思つた。日本人として死なうと思つたのである」。そして、はっきりと転向を決意し、声明書を手紙で友人や留守宅に送つた。妻に送つた声明書ともいふべき手紙の一節に次のように書かれてゐる。

私たちは戦線に於て何度か戦友の行動に涙を流し、敵国民衆の生活を見て泣き、故国からの手紙によりてその民族的団結のかたさにうたれてゐます。私はいたづらに昔からの観念的な理論で自分を縛ることを完全にやめることが出来ました。私はつひに理論家ではなかつたわけです。涙を以つて大和民族と共に生き、涙を以つ

て民族の発展に力いたしたいと思つてゐます。

(『黄塵』付載)

杉山平助は『文芸五十年史』(鱗書房、昭17・11)で、「満州事変が勃発」して、「本来賑やかなもの好きな民衆はこれまでメーデーの行進にさへ、ただ何となく喝采をおくつてゐたが、この時クルリと背中をめぐらして、満州問題の成行に熱狂した。……階級の問題と民族の問題について、イザといふ時日本の大衆が、どつちにより深く魂が動かされるものであるかが、これで明かになつた。」と叙しているが、上田広はたまたま「満州事変」当時は盛況だったプロレタリア文学の周辺にいたために、階級の問題の方に関心を寄せていたにすぎず、「支那事変」となるや、出征して他民族と激しい闘争の渦中に身をおいて、民衆の一人として民族の問題に深く魂を動かされたのである。むろん、それは上田広にかぎったことではなく、吉本隆明がつとに力説しているように、ほとんどすべてプロレタリア文学者のたどった道である。なかでも、労働者出身作家が最も典型的で鮮やかであつたことはよく知られているとおりだ。

### 兵隊作家誕生

上田広が赤紙の召集を受け、応召して戦地へ向かつたのは、昭和十二年九月のはじめ、「支那事変」が勃発して二カ月ちかたつたときである。すでに大正十三年に二カ年の兵役経験を持つ彼の身分は、陸軍工兵伍長であつた。鉄道部隊に所属して、破壊された鉄道や橋梁の修理と保全、さらに新線の敷設などのほか、軍事物資の輸送や沿線の警備や住民の宣撫仕事を主な任務としていた。当初の任地は河北省の石家荘。日本軍は九月二十四日に省都・保定を、十月十日には石家荘を占領し、つづいて西方に進み、十一月九日に山西省の省都・太原を、南方に進

出した第二軍が十二月二十六日に山東省の省都・済南を手中におさめてここにほぼ華北を制圧した。上田広が着任したのは、こうした戦況にあった華北——石家荘と太原を結ぶ正太鉄道の沿線である。二年余、彼はこの地域を転戦し、昭和十四年十一月中旬、召集を解除されて帰還した。

この戦場生活のなかで、彼は暇をみつけ、寸暇を惜しんで鉛筆をにぎり、手張にメモし、あたりに散らかっている紙を集めて原稿を書いていた。その状況を、「上田広帰還座談会（廣津和郎・保高德蔵）」（『文芸』昭15・1）発言に見ておこう。

広津 何か。あのあなたの書かれた原稿用紙なんか、郵便を自分で引張られたといふことを聞いてをります。紙なんかどうです。鉛筆ですか？

上田 はア 鉛筆で……。

広津 それで奥さんの処へ送つてゐらつしやつた？

上田 さうです。戦地からの郵便物は一通二十グラム迄になつてゐます。二十グラムといふと、便箋を何枚も入れられないんです。それで鉄道占領なんかやつてゐるとき停車場などに散らかつてゐる薄い紙を拾ひ集めまして、それを使つてゐました。（略）

広津 （略）ずるぶん一つのものに時が掛つてゐるわけでせうね。さうでもないですか？

上田 はア、「黄塵」が石家荘へ到着した時から始まつて、同浦線の臨分、同浦線の真中に臨汾といふ駅があります。其処へ到着するまで、その間半歳位です。

広津 どの位の距離のものですか？

上田 五百キロ位でした。それで毎日処が**変わる**わけです。毎日といふこともありませんし、一週間位停まつては又次へ——次の占領をして前進する。其処で又二日、三日停まつて、また次へ——といふ風に、破壊された鉄道が漸次修理されてゆきますね。その修理に伴つてわれわれの宿舎も前進するわけです。その前進し、泊りながら書いてゐたわけです。……

戦場から送られてくる上田の原稿は、出征まえに加わつた『文芸首都』の保高德蔵のところへ妻がさっそく持つていき、保高はこの原稿を昭和十三年一月号に第一回を、以下、二、三、五、九月号に載せた。そのうえ、火野葦平の「麦と兵隊」でブームをよんだ改造社と相談し、同社の『大陸』に再掲載の話をまとめた。かくして「黄塵」は昭和十三年十月号の『大陸』に一挙掲載され、十一月七日付で単行本にもなつた。しかし、板垣直子の『事変下の文学』（第一書房、昭16・4）は、『黄塵』について、「改造社は『麦と兵隊』などと似た装訂の本にしたが、気の毒なほど反響が少なかつた。火野氏の作品のすばらしい評判や売行に圧倒されてゐるかの如くであつた」と記している。実際、作者が陣中で芥川賞を受賞（昭和十三年三月）した直後であつたとはいへ、「麦と兵隊」で得た人気と評判は驚異的で、同じ兵隊作家といつても、上田広との差はあまりにも大きかつた。やはり兵隊作家として有名になつた日比野土郎は、「火野葦平さんの凱旋くらゐ華やかなものはなかつた。こんな素晴らしい人気は、人氣を得ようとして得られるものではない。……それにひきかへ、上田広氏の場合はずっと地味だつた。上田広も帰る√と、△も√の字を附けられる程度の感銘だつた。」（「火野葦平と上田広」『文芸』昭15・1）と言っている。ちなみに『東京朝日新聞』は昭和十四年十一月六日付で火野葦平の帰国を二段抜きで伝え、上田広については十一月十八日付「上田広軍曹帰る」の見出しで一段のベタ記事扱ひである。

ところで、実は火野葦平が『改造』に「麦と兵隊」を発表した昭和十三年八月、上田広も『中央公論』に「陣中創作」と銘打った作品を発表しているのである。そのいきさつを、当時『中央公論』の編集部にあった畑中繁雄は、次のように書いている。

一 伍長として大陸戦線を転戦していた火野葦平の「麦と兵隊」が『改造』に発表されて大きな反響をよんだのも、おなじ年の夏のことであった。その一月ほど前、私の自宅へ夜分おそく、山村房次が駆けこんできた。かれは、火野とおなじように一兵士として目下中国戦線にある上田広の名をあげ、かれが前線で書きあげた小説がいままその留守宅に送られていることを告げて、「『改造』に火野葦平が小説を書くそうだが、ひとつこれに対抗して、『中央公論』も応召作家の作品を載せてみないか」と熱心にすすめた。……翌日山村は、私を千葉市の上田の留守宅に同道していった。ペラペラの薄い用紙にこまかい字でビッシリ書きこまれた上田広の原稿を、私はそのときはじめて目にしたのである。（『昭和出版弾圧小史』図書新聞社 昭40・8）

ところが、『改造』に対抗しようと、わざわざ千葉の留守宅までとりにいった原稿——「鮑慶郷」は、陣中創作とは名ばかりの作品だった。村の有力者の娘で駅員である恋人をもつ鮑慶郷が、日本軍の襲撃に備えて警備にきた兵隊の隊長に、一夜の接待を求められて思い悩んだ末、家出して行方不明になるという話には、およそ戦場の雰囲気強く感じさせるところはなかった。だから、宮本百合子が「昭和の十四年間」（『日本文学入門』日本評論社 昭15・8）で評したとおり、「読者は、作者の生きてゐる境遇の烈しさをおのづから念頭においてゐるから、題材だけ異つてあとは机の上でも書けさうな小説に面して、ある物足りなさや疑問を感じた」し、「戦争といふ巨大複

雑な動きに対して、この作者の捉へたテーマは何といつても小さく浅いといふ印象を与へた」のである。

「黄塵」にしたところで、日本軍の鉄道部隊に雇われた二人の中国青年——柳子超と陳子文が主人公で、このうち一人は最後まで日本軍と行動をとともにするが、もう一人は去ってしまふといったストーリーで、日本軍の活躍ぶりや日本兵の様子はあまり描いてはいない。第三作の「帰順」（『中央公論』昭13・12）にいたっては、「この一篇は、最近我が軍に投降した支那兵孫丙君の手記である」と「まえがき」でことわっている始末である。要するに彼の陣中小説には日本軍の活動状況や戦場の情景をほとんど描出してないだけでなく、主人公も中国人だったのである。銃後の国民が切実に知りたいと願っていたのは、中国娘の純愛物語や投降した中国青年の心象風景ではない。日本の兵隊——それは彼らの父や兄や弟たちの日常であり、生活であり、戦いぶりだったはずだ。従軍作家の観戦記やレポートよりも、実際に戦っている兵士の口から、戦争の状況や戦場の情景や兵隊たちのなまの声を聞くことを期待していたのである。

その点で火野葦平の「麦と兵隊」は、副題にも「徐州会戦従軍記」とあって、戦場の情景と兵隊たちの日常生活が活写されていて、見事に銃後国民の願望に込えている。一部の文学者の従軍記のように、誇張された表現や決意表明があるのではなく、淡々とした筆致で戦場風景や日本兵の日常生活が日記体で綴られていることが、かえってリアリティと切迫感や臨場を読者に与えた。むろん、続いて発表した「土と兵隊」（『文芸春秋』昭13・11）も「花と兵隊」（『朝日新聞』昭13・12——14・6）も、火野自身が直接体験したり、見聞した日本軍の戦闘記録である。

それはともかく、「麦と兵隊」が百万部以上、兵隊三部作を合すると二百万部を越えたという驚異的な売れ行きに、当時の人びとの関心と火野の人気のほどが如実にうかがえるが、一方、火野葦平の成功が上田広、日比野士

郎、棟田博、紫田賢次郎といった兵隊作家を輩出したことも看過してはならないであろう。いみじくも、前述の板垣直子は、「ジャーナリズムも、上田氏のものにはえないにもかかはらず、根気よく優遇してのせるのである。時は戦時、ものは戦争文学であるからの感が深い」と述べている。しかし、それゆえに戦後は、芥川賞作家の火野葦平を除いて、ジャーナリズムは彼らを冷遇したのも事実だ。

### 兵隊作家の栄光と挫折

上田広の作風が一変し、兵隊作家の本領を発揮するのは、昭和十四年四月『改造』に発表した「建設戦記」からである。題名にもズバリ戦記とうたっている。もっとも、題名に関しては直属の上司であった水間多嘉郎が序文で「本篇に題するに浜田伍長は初め、『水間隊記』を以てしたが僕は固く之を拒否しその代り部隊長殿より『建設戦記』なる標題を戴」いたと述べているが、「作者後記」で上田広は、「私は前作に於て支那兵を描くにも変つた困難さを感じ、我々自身の姿を描く次作を楽しみつゝ自ら慰めて来た……」と、作風の転換を明白に表明している。『帰順』に収録の「陣中日記抄」を読むと、五月二十二日（昭和十三年）の項に、「最近わが隊内にて見聞せし戦友の奮戦記書きたき欲望しきり。」とか、六月三十日の項に、「『水間隊記』一巻の想なりつつあるも執筆し得ず。この一巻は我が隊の奮戦物語……」との記事が散見するので、「麦と兵隊」の成功に刺激されて作風を変えたとは考えられないが、「建設戦記」のあと、「ほんぶ日記」（『中央公論』昭15・1）、「続建設戦記」（『改造』昭15・2）に「我々自身の姿」と「我が隊の奮戦物語」を書き続けた。

もともと「建設戦記」の題材となっている鉄道部隊の役割が、「麦と兵隊」のように主要部隊の前線活動でないため、読者の関心やなじみが薄く、記述も日記体の簡潔さがなく、いささか煩瑣の印象が免れず、「麦と兵隊」の



人氣と評判には遠く及ばなかったとはいえ、日本軍の戦闘の一端を記録し、兵隊の心理や後方活動ながらも戦場の情景を伝えた作品であったから、一般には好評だった。レコードにも朗読が吹き込まれ、高田保の脚色で東宝の舞台でも上演された。新進文芸評論家の岩上順一も、三部作完結後、『中央公論』の文芸時評「考へる世代」（昭15・4）で、大部分の頁を割いて、上田広を激賞した。

「建設戦記」。それは戦争の絶対的な生死の関頭に立つて、人間を内部から襲ふであらうはげしい情感、ぎりぎりの刹那にむかつてたかまりゆく全的意識と個的意識との燃焼的な発炎的な融合の過程——要するに兵隊が戦場に於いて感じるもつとも本質的な心理が、きはめて深刻にまでとはいへないけれども、すくなくともそれを越えてきたものゝ生活的な真実をもつて表現され、そこにあるいくつかの場面は、おびたゞしい戦争文学のなかゝら、それらのデテイルをつなぐ全体的構成を通じて、戦争の全局面をひしひしとぢかに感じさせるほどの情勢の概括力・文学的形象による時間の把握をしめしてゐる。そのなかでは、時が文学を把握すると同時に文学が時を把握するといふ正しい関係がこゝに見られる。（傍点・原文）

「建設戦記」で兵隊作家の面目をほどこした上田広は、昭和十四年十一月に火野葦平と前後して帰国（前述）するや、火野が『改造』の「火野葦平帰還座談会」（昭14・12）に出席すれば、上田もまた『文芸』の「上田広帰還座談会」（前述）に引張り出され、昭和十五年版『文芸年鑑』の創作概観を担当した深田久弥にも、「一兵士として見事な文学的業績を残した二花形……」と表現され、ここにジャーナリズムのうえで、上田広は火野葦平と並んだのである。

帰還兵作家としてもはやされた上田広は、雑誌の原稿依頼や講演の申し込みが利到したばかりでなく、『文学界』からの同人勧誘もあり、十五年四月から火野葦平と一緒に参加した。近衛文麿の再度の登場で新体制運動が進行し、文壇でも時局協力体制が話題になったが、五月から始まっている文芸家協会主催の文芸銃後運動には、九月に行われた山陽・山陰地方の講演会に出かけ、十月に結成した日本文学者の發起人メンバー（二十二名）に、河上徹太郎・小林秀雄・尾崎士郎らとともに名を連ねた。こうして彼の身辺はますます多忙をきわめ、召集解除で国鉄に復職したのもつかのま、一年たらずで、「指導物語——或る国鉄機関士の述懐」（『中央公論』昭15・7、大観堂書店、同十一月刊）を置き土産に国鉄を退職して作家活動に専念した。小説家を志して二十年、彼はようやく作家としてひとり立ちできたのである。

創作活動に専念した最初の年である昭和十六年は、さすがに彼の活躍ぶりが目立つ。ちなみにこの年の上田広の執筆状況を列記してみよう。

1月	少女工から△創作▽	新潮
2月	民族の海	文芸
	再生記	オール読物
3月	歳月（一）	文学界
5月	歳月（二）	文学界
6月	歳月（三）	文学界
	太原への道△随筆▽	文学界

7月 歲月(四)

写真

日の出

或る日の水間部隊長

中央公論

廻転

文芸春秋

9月

「帰還作家」その他

新潮

鞭

オール読物

11月

勝敗△随筆▽

文学界

叢

公論

12月

遺品

改造

さらに、著書も『再生記』、『帰還作家の手記』、『民族の海』の三冊を公刊している。もはや立派な流行作家になったのである。

この間、軍事保護院の銃後善行録の取材のために東北地方を訪ねたり(四月)、七月七日の「支那事変」四周年には、帰還作家が中心となって文化奉公会を発足させ、例の文芸銃後運動講演会には、二月と十一月の二回にわたって参加した。二回目の南九州地方講演会に赴いた際に、地方文化運動の重要性を痛感し、さっそく郷土文化運動のグループの結成に努力したという。そして、昭和十六年十二月八日、「大東亜戦争」開戦の日をむかえるのである。「今日は十二月十七日である。」との書き出しで始まる単行本『歲月』の「あとがき」で、当時の心境をこり述べている。

軍服を脱いだのは二年前だが、まだ私は三十七歳で、相当行軍力への自信もあり、射撃もうまいつもりである。傷痍を養つてゐる戦友や、再度召されてやつてゐる戦友などを思ふと、ゐたまたまれない気持になる。十二月八日の朝、ラジオのニュースをきいたとき、すぐに私は新しい大陸へ上陸する自分自身の姿を頭に描いたが、実際そのやうなことにならない、と誰がいへるであらう。文学者もまた国民のひとりである。いまはただ仕事を つづけながら、お召を待つのがよいのであるが、その早からんことを祈らないでもゐられない。

上田広が早からんことを祈った「お召」はまもなくしてやってきた。ただし、今回は鉄道部隊ではなく、陸軍報道班員としての徴用である。「支那事变」当初に、内閣情報部は、武漢攻略戦に文学者二十余名のペン部隊を派遣（昭和十三年九月）したが、「大東亜戦争」では、従軍記者の身分ではなく、純然たる兵隊の資格で、文学者や画家・写真家・新聞記者などを徴用し、宣伝・報道隊を編成したのである。そして、その第一陣はすでに開戦直前にフィリッピン・ビルマ・ジャワ等の南方各地に向かつていた。上田広は第二次徴用で、行き先はフィリッピン。火野葦平・柴田賢治郎・三木清が一緒だった。第一次徴用組には、作家では尾崎士郎・石坂洋次郎・今日出海らがいる。第二次徴用組は十七年二月二十八日にマニラに到着した。

日本軍がマニラを占領したのは、「大東亜戦争」が始まってまもない昭和十七年の一月二日。上田広たちがマニラに着いたときは、バターン半島総攻撃の準備中であつた。第二陣が着任すると、さっそくバターン総攻撃に参加する宣伝部隊が編成され、上田広、火野葦平、柴田賢次郎の兵隊作家は、それぞれ西岸部隊、東岸部隊、山間部隊に分れて前線に従軍することになり、三月十二日に上田、十三日に柴田、十四日に火野がマニラを出発した。総攻撃の火ぶたは四月三日を期して切られ、わずか一週間で陥落。つづいてコレヒドールの攻略も五月六日に成功し、

ここに日本軍はフィリッピンの主要地域を手中におさめた。それから二年余、昭和二十年のはじめ、米軍の逆襲にありまでフィリッピンが日本の占領下にあったことは周知のとおりである。コレヒドール攻略後は報道班も手もちぶさたになり、やがて徴用作家は内地に帰還が決定し、上田広も十二月に帰国した。

「大東亜戦争」も、半ばを過ぎると日本の敗色が濃くなってきたが、同時に国内の経済状況も悪化の一途をたどり物資の窮乏は極度に達してきた。出版界も紙不足に悩み、配給制度を実施し、出版点数を制限したり、新聞や雑誌は統廃合を余儀なくされ、頁数は極端に減少した。そのことは、文筆家の活躍舞台を奪うことを意味するが、戦記ものだけは特別扱いだったので、上田広のジャーナリズムへの登場の機会は、相変らず多かった。昭和十八年から十九年という時局下においても、彼の著書が四冊も公刊されたところに、上田広の厚遇ぶりが見事に顕現しているよう。

しかし、上田広の栄光の時代も昭和二十年八月十五日をもって終る。当然のことながら戦勝国によって戦争犯罪人の摘発が行われ、同胞からも戦争責任の追及と指弾が始まり、上田広をもてはやしたジャーナリズムも掌をかえた。彼はこの苦境を乗り切るために、かつて左翼作家の雰囲気なかにいた者らしく、徹底的な自己批判を公表した。

私は自分の戦争協力への責任を意識してゐながら、それでゐて、その迷妄の世界から脱することができないでゐた。それは私にとつては、もつとも恐ろしい精神の飢餓状態であつたと云へる。その精神の飢餓状態は相常に長いあひだつづいた。私はそれが敗戦国民として真にやむをえない、さうあつてこそ日本人であらうとばかり自分自身にいひきかせ、進歩的な人民の手によつてなされ始めた民主主義革命への運動を、「静観」して

ゐた。……

私は敗戦の直後に日本の戦争計画者や、最高指導者を感じて向けた憤りを、いま自分自身に向けなければならぬ。私は、つきつきと変化をみせる社会事象の解明に能力を誇らうとは思はないが、若干のそれをもつてゐて正しくそれに対応できなかった自分自身を、恥ぢる。弁解の余地もなく、申訳ないと思ふ。どうしてこんなことになってしまつたのかと、いまさらのやうに淋しく悲しい。この淋しさと悲しさは、私のやうなものだ。当然受けなければならない鞭のひとつであらうが、自分自身にたいする憤りは、そして大きくなるばかりだ。

(「晩来記——或る報道作家の手記」『中央公論』昭21・9)

このような上田広の懸命な自己批判にもかかわらず、『文学時評』第十三号(昭21・11・10)の「文学檢察」で荒正人に「性根をなほせ」と筆誅を加えられ、「もし一片の良心だにあれば、十年とはいはぬから三年は沈黙を守るべきだ。」とたしなめられた。やがて占領軍の戦争責任者の公職追放は文学者にも及び、昭和二十三年三月、浅野晃、林房雄、火野葦平、石川達三、丹羽文雄、尾崎士郎らとともに「戦犯作家」の烙印を押されるにいたつた。石川達三や丹羽文雄は異議申請が認められ、火野葦平や尾崎士郎は追放解除(昭和二十五年五月)前後から文壇に復帰したが、上田広には戦時下のようにはなやかな舞台に出る機会は訪れなかった。『文芸首都』の復刊に協力し古巣の国鉄に関する歴史や伝記を手がけた彼の文学活動は、多くの人に知られるには地味な仕事であった。昭和四十一年二月二十七日死去。新聞は戦時中の花形作家を小さく死亡記事として扱った。

注1 『文学建設者』は第一巻七号(昭和九年八・九月合併号)で休刊し、その後、『文学建設』と改題された時期は確認していない。第二巻一号(昭10・1)と第二号(昭10・4)は広告で見た。『新文学』は第一巻第三号(昭11・3)だけ手にしている。

上田広 著作目録 (昭和二十年迄)

黄塵	改造社	昭13	・11
建設戦記	改造社	昭14	・5
帰順	改造社	昭14	・8
歩いて来た道	学芸社	昭15	・1
統建設戦記 (※)	改造社	昭15	・5
りんふん戦話集	河出書房	昭15	・7
戦場より帰りにて	学芸社	昭15	・7
指導物語	大御堂書店	昭15	・11
再生記	学芸社	昭16	・4
一帰還作家の手記	六芸社	昭16	・9
民族の海	利根書房	昭16	・11
歳月	文芸春秋社	昭17	・2
離愁	博文館	昭17	・6
遺品 (※)	六芸社	昭17	・6
地熱	文芸春秋社	昭17	・10
海燕	東峰書房	昭17	・12
海燃ゆ	小山書店	昭18	・7

上田広素描

上田広素描

樹天

緑の城

星章

中央公論社

新興亜社

大成出版

昭18・12

昭19・3

昭19・11

(※印は未見)

四四